

No.3001

1899～1962 年サモアにおける政治の近代化に対する現地住民の対応

神戸大学大学院国際文化学研究科 博士後期課程

矢野 涼子

本研究の目的は、1899 年から 1962 年にかけて、サモアの現地住民（ネイティブ・混血・外国人永住者など）が、ドイツ植民地政府（1899-1918）及びニュージーランド統治政府（1919-1961）に対し、いかなる対応を示したかを明らかにすることである。サモアの現地住民によるドイツ植民地政府及びニュージーランド統治政府に対する反応が、顕著にあらわれた出来事としてマウ運動があげられる。本研究では、マウ運動を通じてサモアの現地住民が「近代的な」政府（＝ドイツ植民地政府、ニュージーランド統治政府）に何を訴えたのかを明らかにすることを試みた。

追記：本研究は、当初の予定では 2020 年 3 月に終了予定であった。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の流行の影響を受け、活動期間を 1 年間延長した。2019 年 4 月～2021 年 3 月の活動内容は以下の通りである。

◆ドイツ植民地政府に対するサモアの現地住民の反応

活動内容：①第一次マウ運動関連史料の分析、②スウェーデン王国・ストックホルム、国立公文書館において史料調査を実施、③研究成果を学会にて報告

活動成果：ドイツ植民地期サモアにおいて、総督であるゾルフは「首長制度と慣習法を尊重する」との方針を取っていたが、ゾルフ自身、海軍やミッションと対立しており、この方針にサモア統治に関わったすべてのドイツ人が従ったわけではなかった。ドイツ領サモア成立以前から、ゾルフの方針とは異なり、サモアの現地社会に介入したドイツ人がいたのである。ドイツ植民地政府に対し、サモアの現地住民たちは、現地社会に介入してくるドイツ人や「首長制度と慣習法を尊重する」方法に対し不満を持ち、反統治運動を起こす者がいたといえる。

◆ニュージーランド統治政府に対するサモアの現地住民の反応

活動内容：2018 年度の研究成果を学会にて報告